

# オーストラリアのハイスクールでのインターンシップ

## — 日本のアートを通して行なう日本語教育 —

メリディス・スティーヴンズ(徳島大学総合科学部)

アントネラ・キエラ (南オーストラリア州イタリア語教師学会共同会長)

中島 浩二 (徳島大学総合科学部)

### はじめに

2017年の日本の夏、南半球に位置するオーストラリアでは冬の季節にあたるが、徳島大学4年生の前田希さんがアデレードにある **Glenunga** インターナショナルハイスクールにおいて日本語教育のボランティアティーチングを行なった。この交流プログラムが設立された理由は次の2つである。1つは、当プログラムによって日本人学生が海外での教育に携わる機会を得られること。もう1つは、オーストラリアにおける日本語や日本文化学習を促進するためである。日本では、外国語学習というと専ら英語学習を意味するが、オーストラリアの子どもたちは複数の外国語を広く学ぶという違いがある。その中でも、日本語はオーストラリアの小中高校で人気のある言語となっている。

### 理論的根拠

この研究の理論的根拠となるのは、学際的な教授法の実践として、アートを通して日本語を教えるということにある。つまり、教師と生徒間、あるいは生徒同士がコラボレーションする中で、日本語および日本文化の両方を学ぶということが期待される。さらに、オーストラリアの子どもたちが日本のアートという新たな題材を通じて創造的スキルを培っていくことも期待される。

### コラボレーション

Vygotsky (2012) は、子供たちが大人とコラボレーションして作業をすることの持つ教育的役割について説明している。最終的にこのようなコラボレーションを行なうことが、子どもたちが自律的に作業することに繋がっていくのだ。大人の手助けは、「気づかれない程度の存在 (invisibly present)」(p. 202) であると述べている。Jerome Bruner (1996) は、コミュニティーに参加することで学習がより促進されるという意味で、それが果たす役割について概略を述べている。

参加的、順行的、共同的、協調的で、受身的でなく能動的に意味を構築するよう委ねられたときがベストなのだ。つまり、これまで伝統的に学校でなされてきたやり方よりも、そのような状況のほうが遥かに科学・数学・言語をより良く教えることができるのである。(p. 84)

Thornbury (2013) は、言語学習は単なる認知的活動ではなく、社会的実践でもあると述べている。教室内で言語的やりとりと周辺言語的やりとりの両方が行なわれることが重要である(p. 73)、と。このような洞察が、教師と生徒間の言語的かつ周辺言語的やりとりが言語学習につながる環境を提供するという今回の学際的プロジェクトの推進力となった。今回のプロジェクトにおいてアートの形式を取っているものは全て言語的なものと言語的表現を具現化したものの組み合わせになっていることが前提として求められている。

### 創造性を育む

創造性は、訓練を受けてある種のスキルを習得することが前提となる。私たちのプロジェクトでも、まず最初に教師による教育や訓練を行なうというプロセスを経て、その後で生徒たちが自律的に学習や作業ができるようになることを期待している。このプロジェクトの初期の段階では、様々なジャンルで日本人アーティストが作品を作り出す様子を生徒たちは観察する。書道家が作品を作る様子を実際によく観察すること、実際に書道を試みてみることで、書道家によるフィードバックに応えることなどの経験なくしては、高度なレベルの書道にたどり着くことはありえないだろう。このような訓練や修行を通して手法や技能を習得した後にはじめて創造性が開花するのである。折り紙、マンガ、ちぎり絵、4コマ漫画などの様々な日本のアート形式へと誘導するよう研修させることにより、視覚芸術分野での創造性を培う基盤を提供することができたのである。

### 学際的教育

学際的教育・学習は教育分野では新しい概念というわけではなく融合的手法なのである。しかしそのような手法は、オーストラリアの中学校では専門のカリキュラムとしての扱いを受けてはいない。

予備調査的な学際的アプローチがオーストラリアの中学校の第二言語の授業で、言語教育の重要性を広く知らせたいというある種の動機を伴って、いろいろと試みられている。

オーストラリアには様々な人種や文化があり、それ故に全国の学校現場では多くの言語を学ぶ機会が提供されているのだが、単一言語社会であるという考えがまだ圧倒的に支配的である (Clyne, 2005, 2007)。残念ながら、現状では第二言語 (L2) を学ぶ重要性はオーストラリアの広範な教育現場や社会全体で優先事項とはなっていない。しかし、現在、地方の行政および政府は言語教育の向上に意欲的に取り組んでいるので、将来的には期待が持てる。

学際的教育では、教科内容に特化したアプローチあるいは学際的なアプローチを活用してトピックを分析したり、関係性のある領域のものを見方を活用して融合的学習をおこなう。

大まかに言って、分野横断的学際教育は次のように説明される：

- ・分野内の — 分野内の概念や技能
- ・多分野に関わる共通テーマ — 個々の専門分野内で別々に共通テーマに関連したスキルの周辺概念を学ぶ
- ・学際的 — 総合戦略的に複数分野に渡る統合的知識やプロセスから概念や技能を学ぶ
- ・分野横断的 — 複数分野に渡る統合的知識やプロセスから概念や技能を学び、それを各分野の見方を超えて他の分野のコンテキストに移転可能なものにする (DECD を参照)

本論文の共著者の一人であるアントネラは、30年以上の永きに渡って教育現場で英語とイタリア語の教師としての経験がある。アントネラは着任当初から教科のヒエラルキーに気づいていた。コミュニティの考え方は、彼女の英語クラスを受講した8年生(日本の中学2年生に相当)の保護者面談での親からの要求の強さや内容で明らかだった。それに対してイタリア語のクラスを受けている生徒の面談では、保護者たちは著しく低い興味しか示さなかった。このような傾向は、私立学校と国立学校のどちらでも顕著で、社会的経済的に低い階層でも中間層でも同様だった。

言語学習分野に対する継続的な支持を訴える必要があるとの前提に立って、アントネラは英語やイタリア語のクラスで学際的教育に焦点をあてた教育をおこなった。それは実際に効果的だったし、文法の仕組みや言語パターンについての知識を深めたり、2つの言語間に見られる類似性や比較を描いてみたりすることで、学生の言語能力を発展させる手助けをすることができたのだ。それからは、学科を超えて知識を融合させることが、彼女の教育手法のレパトリーとなった。

アントネラはその可能性の探求を続ける中で、例えば歴史、芸術、科学（科学の例を参照）など他の学習分野の教師たちとともに学際的作業ユニットを開発した。また、産業界や日常生活（コーヒーユニットの例を参照）との結びつきも探し求めた。それによって、生徒たちが住むコミュニティの中でイタリア人の生き方に対する彼ら彼女らの評価や感謝の気持ちを高めることに繋がるのではないかと考えたからだ。バリスタとしての実践の経験を生徒に提供し、高学年教育での課外単位としても正式に認可されているため、コーヒー文化のユニットは継続的に人気のあるものとなっている。

現在の全国的カリキュラムである **Australian Curriculum** は3次元で構成されており、科目ごとの専門的知識、汎用的能力、そして科目横断優先型を包含している。このカリキュラムが実施されることにより、学習のパラダイムシフトが起き、学際的教育的を模索していくための広大なプラットフォームが作り出されることとなったのである。

オーストラリアの学校教育のあらゆるレベルでサイエンス・テクノロジー・エンジニアリング・数学（頭文字をとって **STEM** と呼ばれる）分野の学生の基盤的スキルと達成度を伸ばすために熱心な教育的取り組みが行なわれ、その中でアントネラは言語学習の地位を再活性化させるために、**STEM** との結びつきについての研究を行なった。（**DECS**）他の教育者たちも同じような研究を行ない、その成果として、**STEAM**（**Science, Technology, Engineering, Arts and Mathematics**）が創り出された。ここでは、あらゆる学習領域に渡って高い抽象レベルで思考し、チャレンジし、知的能力を伸ばせるよう、教育実践が行なわれるのだ。

**Australian Curriculum** と **STEM** の両方が刺激しあって、「日本のアートを通して日本語における創造性」を探求するという試みが実現することとなった。

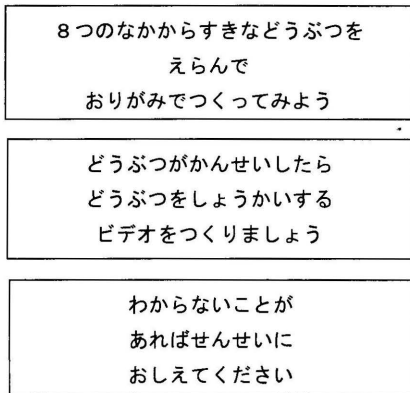
### 日本語アートプロジェクト

前田希さんは、**Glenunga** インターナショナルハイスクールでボランティアのアート講師として選抜された。彼女の専門はグラフィックデザインおよび版画製作であり、徳島県の放美展洋画部門で入選を果たしている。学際教育の一環として、彼女は5週間に渡り、同校の12-13歳の8年生に対して日本語で折り紙、ちぎり絵、4コママンガ、書道を教えるよう要請された。それは、学習のターゲット言語である日本語を使ってアートを学ぶことにより学習効果が上がると考えられたからである。言

話はタスクを達成するための手段であり、それ自体が目的ではないのだから。

#### 4つのアート形式：折り紙、書道、ちぎり絵、4コマ漫画

折り紙は世界的にもよく知られている。前田さんはオーストラリア滞在中に、オーストラリアの生徒に見せるために100を超えるスライドを作成した。折り紙に使用する紙は徳島大学から送られたものである。彼女が作成したスライドから幾つかをここに抜粋して示す。



#### 書道

墨汁、硯（すずり）、半紙、筆（ふで）、そして団扇（うちわ）は徳島大学から送られたものだ。ここに、生徒が作製した作品の一例を示す。団扇の片面に書道作品を書き、反対側の面にちぎり絵作品を貼り付けている。（英語版の写真を参照）

#### ちぎり絵

ちぎり絵は、オーストラリアの生徒たちにとっては馴染みのないアート形式だった。前田さんは、ちぎり絵に使うのに適した伝統的な日本の紙（和紙）をいくつか選び、あらかじめオーストラリアに送っていた。（英語版の写真を参照）

#### 4コマ漫画

オーストラリアの生徒たちは4コマ漫画についての知識を持ってはいたが、今回は日本人アーティストによって直接指導してもらったにない機会だった。このある種の漫画である4コマ漫画は、4つのフレームの中に1つのストーリーを描いたものなのだが、オーストラリアの生徒たちには目新しいものであった。前田さんが

提示した4コマ漫画の活動では、有名な日本のお話「桃太郎」を取り上げていた。理解と製作という両方の作業が、この活動の重要な役割となっている。講師が4コマ漫画の最初の2コマを読み、それを活かした形で残りの2コマを埋めるといった具合である。

### オーストラリアで英語を使って授業をするための準備

講師である前田さんがオーストラリアでインターンシップをおこなう下準備として、事前に英語コミュニケーション能力の基盤を確立しておく必要があった。オーストラリアの学校のスタッフやホームステイ先の家族などと英語で意思疎通する必要性があったからだ。彼女は英語力を伸ばすために、少人数で構成される2つのコミュニケーション英語の選択科目のクラスに登録した。これらの授業を通して、即座に英語で聞き、英語で応える練習の機会を得ることになり、それは即ち、その後オーストラリアで彼女が置かれる状況の疑似体験にもなったと考えられる。彼女のホームステイ先の家族との会話では、彼女は英語のメッセージを即座に理解し、即時に応答しなくてはいけなくなるだろう。彼女が選択登録したクラスのうちの1つのクラスは学生数2名という少人数だったため、彼女が英語でコミュニケーションをとる際には、実際のコミュニケーション同様の個人的フィードバックを受けることができた。それに加えて、彼女は徳島大学に設置されている「英語コミュニケーションスペース」に所属する二人のネイティブスピーカー講師のうちの一による個人指導も受けることができた。

オーストラリアから徳島に戻ってきてすぐに、前田さんは次のようなアンケートに回答し、彼女からそれを本報告において掲載してもよいとの許諾を得た。

### アンケート

(英語版を参照)

### 結論

このプログラムは日本とオーストラリアの双方の機関に恩恵があった。日本人学生はオーストラリアの学校コミュニティに関わることができ、オーストラリアのスタッフや生徒たちと交流することができた。彼女の英語力は上達し、英語でコミュニケーションをとる自信も身に着けた。

オーストラリアの学校が受けた恩恵は、言語的なものと文化的なものがある。学生たちは、日本語ネイティブが日本語でおこなうレッスンに参加することができ、日本人アーティストによる4つの日本のアート形式について学ぶことができた。生徒

たちは、日本から送られてきた本物のアート素材を使うことができ、日本の伝統的なアート形式を使うことで創造的経験ができた。

**Glenunga** インターナショナルハイスクールで行われたこのプログラムは引き続き今後も実施され、前田希さんが今回創り出した素材を使って、別の日本人アート学生がボランティアティーチングを行なう予定である。このプログラムは、今後オーストラリアの他の学校でも行われる可能性もあるし、似たようなプログラムが、今度は英語を使って西洋のアートを学ぶという形で、日本でも実施される可能性もあるだろう。

### 参考文献

(英語版を参照)